

物心つく前には、俺の傍には必ずそいつがいた。

白い半袖のワンピースを着た、長い黒髪少女。俺はそいつと、何らの疑問も抱くことなく、四六時中一緒に過ごしていた。生まれたときからずっとそうなのだから仕方あるまい。おぎやあと産まれ出て数カ月の俺がなぜ、両親の名前を呼ぶことより先に、人を疑うことを覚えなくてはならないのだ。

そいつは俺よりも少しだけお姉さんで、子供用布団の上で寝かされた俺の傍に寝そべって微笑みかけてくれた。子守唄も歌ってくれた。二歳になると絵本を広げた俺の隣で文字を読んでくれた。話はできたが触れあうことはなかった。彼女は俺にも何か他の物にも触れることはできなかった。

そいつの名前をユキという。教えてもらったのか俺が名付けたのか、きつかけもなく自然とそう呼び始めたのか定かではないが、俺はそいつをそう呼んでいた。

母や兄がユキに話しかけるのを見たことはなかった。三時になるとテーブルに乗せられたおやつやジュースは二人

分だったし、遊園地やデパートに行くときユキは一人お留守番だった。幼稚園に通うようになったくらいに、どうやら他の人にはユキが見えていないらしいと気付いた。決定打があったわけではなくて、じわじわとそういうものらしいと気付いて、どうか、常識を学んでいたのだと思う。

母のドレッサーにも、夜の窓ガラスにも、俺と並んだユキの姿は映らない。何で、と俺が尋ねると、ユキはまん丸い目でゆっくり瞬きをして、何でだろうねと答えた。

小学校二年生の時、生活科の授業で「子供の頃の話聞いてみよう」という宿題が出たことがあった。母は、アンタはねえ、ユキちゃんと遊んでたってよく言ってたのよ、友達にユキちゃんって子はいないのにね、と答えた。俺はシチューの人参を抜き型で星にする手伝いをしながら、隣でユキが自分の毛先を弄んでいるのをちらりと見た。

「謎のユキちゃん」は子供時代の話の定番で、父と兄が怪談っぽく語るのが俺の気に障ってしかたなかった。しかし母が言うには幼い子供にはありがちな現象らしい。イマジナリー・フレンド。想像上の友達。ぬいぐるみに話しかけたり、〇〇ちゃんがこう言ってるの、と親に本心を打ち明けたり。そうして幼児の心は成長していき、それにつれて

友達は消失するものらしい。へえ、なんて言いながらご飯を食べる。ユキは俺の隣で膝をついて食卓を眺めている。

寝る子は育つ、らしいがユキの姿も段々と成長していた。俺は常夜灯の、あの橙色の明かりが嫌いだった。中途半端に見えるというのがよくない。真っ暗闇にしてみました、恐ろしいあれやこれやが居たとしても、気付かずに寝ていたいと幼い時は思っていた。しかしユキは暗いのを嫌がって、長く暗闇に居ると自分の喉元を抉れるほど引っ掻いてしまうので、自分の部屋を貰っても、眠るときには必ず常夜灯を点けていた。もはや体に染みついて、そうしなくては落ち着かない。真っ暗ではユキはおやすみを言って、その後もベッドの脇にしゃがみこんでじっとしている。寝転がって休んでいるところを、見たことはない。

小学生のとき、ある女性歌手の息子が、急死したというニュースがテレビで流れたことがあった。皿洗いを終えた母親は椅子に座りながら、あなたにはもしかしたら姉がいたかもしれない、と言った。兄を産む前のことで、へその緒が絡まってしまって、と。あまり語る気はないのか言葉少なだった。

「子供は二人って決めてたから、お姉ちゃんが生まれてた

ら、もしかしてあんたに会うこともなかったかもしれない」だから必ずしも悲しいことではないんだけどね、と母は言った。兄はそれに続けて、俺が弟が欲しいって言ったのだから、俺に感謝しろよ、と笑っていた。冬頃だったから、もし生まれてたら深雪ちゃんって名前つけてたかも。

ミユキ姉ちゃんか。と二人とも完全に停止した俺の表情を、命の尊さや申し訳なさ故と勘違いしたらしく、話を明るいう方へと導こうとしていた。しかし俺は中身の詰まっていない頭で考えていたのだ。ユキは俺の、産まれることがないままだった姉なのではないか。それが丁度夏ごろの話で、俺は前日兄とユキとに挟まれて「恐怖！ 本当にあつた怖い話！心霊映像特盛りSP」を見たばかりだった。幽霊は、何事かの未練やしがらみがあつて、天国にも地獄にも行けずに彷徨っているらしい。何年も何年も。それは何だかとても悲しい話のように俺は思えて、数日後ユキを玄関まで呼び出して、塩を一つまみ振りかけた。我ながら「きょうの三分キッチン」の講師ばりに上手にばらばらと振りかけたと思つたのだが、白い粒は彼女の体をすり抜けてたときに落ちるばかりだった。

「和也、これ砂糖だよ」

「えっ」

ユキに指摘されて、俺は自分の指先を舐めてみた。じんわりと味蕾に甘さが伝わる。

「掃いときなさいよ。ア리가たかってお母さんに怒られても知らないから」

「はい」

ユキには全く変化がなかった。私に消えてほしいの？と聞かれて、俺はそうじゃないけど、と答えた。もし幽霊なら早く輪廻の渦にでも飛びこんでしまっつて、生まれ変わつてもう一度会いに来てほしいな、と思つていたような気がする。彼女のことを誰にも話せないことは、少なからず幼い俺にとってストレスの溜まることだった。

中学生になって、家庭科で子供の発達段階なんかを習い出し、自我の確立や反抗期についての知識も得た。背丈も伸びたし声も低くなった。問題はユキがまだ俺の傍に居ること。それだけだった。

思春期だ。一人になりたいときもあるのに、ユキは常に俺の隣に張り付いていた。テスト期間中に仮眠したときには起こしてもらったし、つまらないテレビ番組を見ながら

ああだこうだ話せるのは確かに楽しかったし感謝もしているが、煩わしさの方が遥かに勝つていた。高校生になって、部活にのめり込み、家には食事と寝るためだけに帰つていくような生活になつても、部屋に行けば常にユキがついてくるのだ。追い払つても怒つても。この頃はユキの存在をありがたく思うときと、ユキの存在の消滅を願うときがぐるぐると入れ替わつて忙しなかった。罪悪感ほど扱にくい感情はないなと実感する日々だった。ユキが幽霊なのかどうか俺には判然としなかったが、もしユキを縛るものがあるとすれば、それはこの家、この家族だろうと俺は思つた。ユキは学校についてくることはなかったし、玄関から一歩も外に出たことがない。俺は遠くの大学を目指すことにした。地元の大学以上にレベルの高いところへ、という建前で、本当は想像上の友人との別れのために。まさか俺について安アパートまで移動してくるとは想像もせず。

学部棟の西口まで友人に案内された。戸を開けて、途端うるさく耳に届いた蝉の大合唱に苛つきながら、俺は真つ直ぐに立つ後ろ姿を見つけた。パーカーのフードを被った

頭の陰から、煙草のさきつぽが突き出していった。

「坂本」

友人が呼ぶとそいつは振り返った。コーヒーの缶に灰を落とす仕草はいかにも手慣れていたが、似つかわしくない童顔だった。

「何」

「前話してたる。こいつがさ」

そう友人は坂本に話しだした。俺の友達にバリ靈感ある奴いるよ、見てもらったらどうだ、と、ツかれてる気がする、と溢した俺を見かねて言ってくれた心優しい友だ。感謝する。じわじわと、立っているだけで汗がにじむような日で、俺は友人が説明し終わるのを待っていた。

「それで、女の霊がついているかどうか」

坂本が不意に俺に視線を寄こした。俺は頷いた。そう、と言いながら坂本は俺のつむじからつま先までゆっくりと視線を落としていった。何故かはわからないが、俺は暑さを一瞬忘れていた。ただそいつから目を放せないままで数分、本当は数秒だったのかもしれないが、つつ立っていることしかできなかった。

「憑かれてないだろ。悪質なものも無害なものも生霊も。気配

すらしない」

坂本はそう言うのと頭を搔いた。腕につけたブレスレットの中に数珠らしきものがある、俺はこいつを疑う気が全く失せてしまっているのを感じていた。

「何か見えんのか。妄想じゃね」

心理学の授業で出てきた解離性同一性障害という言葉が脳裏をちらつきだした。ユキの存在が、俺の想像なのだとしたら、俺が異常だったとしたら。今は考えるのは止めだ、止め。俺と友人は坂本に礼を言っ、そこで別れた。

自転車坂を下る。アスファルトから立ち上る熱気が鬱陶しくて溜まらなかった。並木の影に入る一瞬だけ涼しい。暑い涼しい暑い涼しい暑い、を繰り返す。ペダルを力いっぱい踏み込んで、自分で風を起こすほかない。最速記録で帰宅して、アパートのドアに鍵を突っ込む。ため息が出た。鍵を回して抜いて、ドアノブを握って回して、動作が漫然としてしまうのは俺のせいじゃない。

おかえりなさい、と声がした。ユキは床にべたりと座り込んでいた。たがいま、と返すのさえ癪だった。

大学に入ってすぐに初めての彼女ができて、何度かデートをして、アパートを歩き来するようになった。彼女が来

てもユキは遠慮をせず、彼女の傍に座ってその顔をまじまじと眺め続けたり、わざとベッドでごろついたり、こちらの気を立てるようなことばかりするから、しばしば言い争いになった。うんざりするほどの口論を経て、彼女が来たらベランダで待機という約束をしたのに、この前それが破られたから、俺はもう口を聞いてやらない覚悟をした。

彼女の細い体をベッドに横たえて、でんき、消して、の震える声に従って常夜灯を点けて。そのときユキが部屋に戻ってきているのに気が付いた。何の感情も落としこまない二つの瞳で、俺と彼女を眺めていた。俺はユキを睨んだ。ユキはベッドに背を向けて、凭れて座った。出て行けよ、と内心で怒鳴ったが効果なんてあるわけがない。怪訝そうに彼女に名前を呼ばれ、髪を梳いて誤魔化した。ユキを消す方法を俺は知っている。常夜灯を消して完全な暗闇を作ればいい。真つ暗闇でソロ活動してきた俺の知能を舐められても困る。しかししたら乱れる彼女の姿は見えなくなる。それは惜しい。はい却下。本当こいつどうにかしてくれよ。俺はユキの小さな後ろ頭を睨んだ。他人に見せつけて興奮する趣味はない。見ないように見ないように気にしないように。彼女にキスしながらそんなことを考えていた

気がする。細い首筋に顔を埋めて跡をつけて、頭を上げたときに、ユキと目があった。何か声もなく眩れているのが分かった。薄い唇が常夜灯に照らされて濡れて光っていた。その後はユキの方を見ることはしなかった。彼女の切羽詰まった顔だけを見ていたのに、頭にちらつくのはユキの目だった。

そういうわけで冷戦状態だ。鞆を置いて、俺が気に入っている座椅子に座りこむと、ユキはこちらを一度だけ見て、すぐ視線を彼女が置いていったファッション誌に移した。恐ろしいことにユキはアパートに来てから物が触れるようになったのである。未だに俺に手を伸ばしても、すり抜けて掴めないままであるが。もしこいつが怒ったら皿だとか文房具だとか電気スタンドだとかを投げつけられる可能性が生まれてしまった。下手は打てない。武器になりそうなものは何かないだろうかと部屋を見回す。部屋の隅の姿見には、俺の姿しかない。俺と、宙に浮いた雑誌なんていうシュールな光景が映っている。冗談じゃない。

そういう様々なことに気が付いたのはほんの昨日の話だった。彼女が帰ってしまってから、ユキはしばらく俺の前から姿を消した。何せこの世に生まれてから初めてのこと

だったので、ブリーフを卒業してトランクスを履き始めた日と同じ位の心許なさを一週間ほど感じるようになった。

ユキは消えてしまったわけではなくて、狭いクローゼットでずつと体育座りをしていた。おら出るよ、と脅して追いついたときには、彼女の喉には爪で引つ掻いたみみず腫れの跡が幾重にも残っていた。

「お前、幽霊じゃないんだな」

「塩ぶちまけても消えないんだからそうなんじゃない」

何と返そう。考えるよりも先にユキが言った。

「和也は透明人間って信じる？」

「信じない」

「なぜ」

「透明人間を見た、って人がいないから。そもそも見えない透明じゃないってことだし、俺は見えない何かにぶつかった試しもない。立証は無駄だ。悪魔の証明だろ」

私は。私はいないの。和也は私を見ているのに、話しているのに私はいないの。

はあ？ と俺はつい言って、ユキはもういいと言った。

俺は冷蔵庫に飲み物を取りに行つて、ユキが俺の腕を握るように掴もうとした。彼女の手は俺の腕をすり抜けた。ユ

キがじつと掌を見つめている。そんな顔すんな。なんで俺が切なくならないといけないのか。

ユキの姿が見えなくなってしまういいのに、と願った時に、実家から電話がかかってきた。昔世話になった親戚のおじさんが亡くなったから、休日だし帰ってこい。今から出れば高速バスには間に合う。鞆に着替えやら充電器やらを詰めながら、ユキにお前は来るのか、と尋ねた。行かない、と答えられた。

バスを乗りついで、親戚の家に着いた頃には夕方になっていた。昔、遊びに連れて行ってくれたおじさんの鼻には脱脂綿がつまっついていて、目は固く閉じられていて、もういなくなってしまうのだ、という実感が迫ってきた。

母方の祖母の姉の家にあたるのだが、古くて大きい屋敷なので、来るたびに緊張している。玄関の梁に写真が飾つてある。軍服を着た男性の写真で、胸には章飾が並んでいる。ぼんやりと眺めていたら大伯母に呼ばれた。昔から可愛がつてもらった人だった。いつもどおり、アルバムを見せられて思い出話を聞く役が回ってきたということだ。手伝いも特にならぬことがないらしいから素直に従った。古い

写真を見るのは嫌いではなかった。この人の息子さんのお嫁さんがね、と広がっていく人物の相関を理解することはとうに放棄している。

「このね、私の叔父が帝国大學を出ていてね、優秀な人だったのだけれども」

うんうん、と言いながら緑茶を飲む。写真はすすけていて表情までよく分からない。

「研究もできたのに、いいとこのお家に婿に行つてね、騙されよつたんよ」

「うん？」

「お嫁さんが白痴でな。そのことを隠されたまんま結婚しおつた」

俺は大伯母の皺の深く刻まれた顔を、その影の形を見ながら、年寄りの使う、今は使用することが好ましくない言葉というのはどうしてこうもストレートなんだろうと思つた。単語に冷たさがこもっている気がする。

「んでそのお嫁さんがすぐに死んでもうて。で代わりに妹と結婚したでな、その妹も色狂いでな」

おやおやまたか、と思ひながらせんべいを一口かじる。姉が死んだから代わりに妹と結婚というのも何だか薄情な

話だと思ひながら、俺は湯飲みを手にとつた。

「子供も三人おつたけど、ヨシエさんという、娘さんだったで、会うたびにその後妻さんとその子の姉やらなんやらに、さつと着物の袖で隠されてしまつてな、今思えばなあ、あの子の肌の白さは異国の血がはいつたんじゃない」

よくそんなとんでもない話を俺にするもんだと思ひながら、ヨシエつてどんな字を書くの、と俺は尋ねた。敬うにさんずいの江。敬。ケイ、キョウ、ヨシ、ノリ、タカ、ユキ。漢字の他の読み方を頭に思い浮かべながらぞつとしない気持ちしていると、祖母はあの子はかわいそうじゃつた、かわいそうじゃつた、と繰り返す。

大伯母の叔父は、二度も騙された末、その恨みを数十年隠し通した末に、長野の別荘で無理心中をしたらしい。

俺は大伯母の手を引いて、座敷まで連れて行つた。軋む廊下を歩いていると頭にユキの白い肌が、思い出される気がした。あり得ない話だった。幽霊ではない、というあの男の言葉を信じるならば。

バスに乗つてアパートまで帰つて来た時、ユキはベッドの上に横たわり、胸の上で指を組んでいた。寝ているわけ

ではないと、死ぬはずもないと知っていても妙な汗が出た。小さい時から、傍に居たのだ。子守唄を聞いた。一人で留守番も怖くなかった。何も言わずに話を聞いてくれた。俺はこいつから何かを吸い取るように大きくなって、こいつの体は白く細くなっていた。

俺が常夜灯を消さないのは、こいつが喉を掻き毟って泣くのが、恐ろしくて耐えきれないからだ。こいつは本当は居ないのに。一体どんな分類のもので、俺の傍に居るのか分かりもしないのに。誰もこいつのことを知らない。俺の他には誰も。言ったところで俺が変に思われるだけなんだ。普通じゃないということが、どれほど面倒くさいことなのか知らないほど、知らないふりができるほど、俺はもう子供でもなかった。細い肩を掴むように、手を伸ばした。掴めないのは分かりきっている。

しかし指先には体温が触れた。肌が温かく掌を押し返してくる。ユキが目を開けた。さわれた、と言うように唇が動くのが見えた。

「おかえりなさい」

おかえりじゃないだろ、馬鹿。

何がそんなに悲しかったのか、そもそも悲しかったのか

わからない。何一つ考えなんかなくて、手に触れた肌の温かさに突き動かされていた気がする。ユキの喉に手を伸ばし、めちやくちやに力を込めた。ユキの喉が驚きでひゅつと空気を吸い込んで音を鳴らしたのを、指先を拍動が伝わるのを、あまりにも近い距離で感じていた。掌が熱い。

こいつがいて迷惑したことなんて数えきれない。親が、兄貴が、彼女がユキをないものと扱ったびに、ユキは寂しそうに笑う。俺の悔しさはどこに持っていけばいい。世間一通りの幸せは、こいつがいる限りとてもじゃないが掴めない。

「わたしに、きえてほしいのね」

切れ切れの掠れ声が耳に届く。ユキの顔を見ることができそうにない。

そうだと答えたらお前消えてしまうだろう。

俺のために死んで、って頼めば、お前は笑顔で消えてしまうだろう。

ユキが何なのか分からない。ユキのことを誰も知らない。他の人間なんて本当はどうでもいい。愛したって何にもならない。生まれたときから傍に居る存在。姉みたいなもの。

大事な半身。認めたくない。俺にはそんな覚悟はない。愛

するに値しない。消してしまえばいい。

「どこにいつてもいいの、だれと一緒にいてもいい」

驚いて前を向いた。ユキの顔が、目尻が緩んだのが分かった。

「わたしが、ここにいたってことだけ、わすれないで」

掌にびくりびくりと、二度ユキの痙攣が伝わって、俺は手を放した。放してしまつて、ユキの腕を引つ張つて抱きしめて、離れることはもう永遠にできないだろう確信めいた予言が胸の内に生まれるのを堪えていた。長く一緒に居すぎたのだ。自覚することを躊躇うような恋をしている。本当に、あさましくみつともなく恋をしている。

俺にはお前の姿が見えている。声も聞こえている。触れている。愛している。

部屋の隅の姿見には俺の姿しか映っていなかった。

ユキがかずや、と呟いて笑つた。俺ばかりが泣いていた。

抱きしめて寝るなんてことは初めてだった。それだけでなく馬鹿みたいに暑いのに。いつも通りの橙色の明かりの中で、ユキはがりがり俺の背を引っ掻いていた。離してほしいのかその反対なのか確かめることはしなかった。姿

見の前で背中を映してみる。当然みみず腫れはありはしなかった。

大学の西口のところで、坂本がオレンジジュースの缶を手で煙草を吸っていた。

「何か用」

「いや別に」

「その後どうだい。何か見えるの」

「別に」

灰を缶の中に落としながら、坂本は煙を宙に逃がした。

「見えちゃいけないものが見えるのって、どんな気分」

俺が尋ねると、坂本は頭を掻いて、俺が何かしら見えてるって信じるんだ？ と言つた。

「え、嘘なの」

「嘘ついてもねえよ見えますよちゃんと」

唇を尖らせて坂本は言つた。右の手首の数珠を、左手で撫でながら。

「痴漢とか露出つて変態行為だろ」

「……何の話」

「聞いてろって。そういうド変態っぽい性癖を持っていて、

けどAVなり妄想なりで満足できるんだったらそれはそれで何の問題もないわけよ」

ここまでOK？ とどنگり型の目に力を入れて言われたが全く怖くなかった。俺は頷いた。

「本当に、現実にそういうことをしたくなって、抑えきれなくて、しちゃったらブタ箱行きなんだってこと」

大抵の特異体質ってのは、本人が社会生活を送っていく上で困る、ってなって初めて解決するための努力をしなきゃいけない。俺はこの体質に関しては今のところ別に困ってない。

「で、お前が見えるっていうその女？ もお前が困ってないなら何の問題もないだろ。違うか」

「違うないね、と俺は答えた。」

傍に居てね、と今朝ユキが言った。俺はユキの手を取ってくちづけた。ユキはなんだか古風な、恭しい礼を返した。姿見を見た。当然俺一人が映っている。もう何もかもが怖くなくなった。

最初から怖いものなんて一つしかありはしなかったけれど。

月刊缶じうす十月号 通巻182号
2012年9月26日発行
編集人 仰架 石川裕子
発行所 広島大学文団BOX